農村文化景観の今後の推移と それへの計画的対応の再検討

Rural Planning as a Tool Towards Creation
of Rural Views and Cultures in Future

富田 正彦*

Masahiko TOMITA

I はじめに

—私の農村計画研究20年を振り返って—

筆者はこの十数年、水田の大区画化再圃場整備の創出を核とする農地利用整序のあり方に研究の主眼を置いてきた¹⁾。農業土木から農村計画に入った者の一つの歩みであった。幸いこのテーマは、平成4年5月の農林水産省の「新農政の展開と農村計画の新たな課題」の発表で、社会的にはメドが立つ見通しになった。

並行して検討を進めてきたいま一つのテーマに混住地域のあり方がある。国土を高密度都市空間と高能率農地空間（前述の大区画圃場より成る）と広範な混住空間の3空間に土地利用区分すべきだというのが筆者の持論²⁾であり、その意味で筆者の農村計画論はこの3空間への区分のあり方論ともいえるのであるが、肝心の区分後の“混住地域”の具体的なイメージがなかなか見えてこない。そんなことで、数年前に「混住地域整備論」なる素稿を書いておりながら、発展させて論文として公表することをまだ果たせないでいる。

また、学校教師としては、町村役場を場とするジェネラル・マネージャーの活躍への期待、あるいは、地域と地球の環境管理のあり方、などとの関わりのもとでの農村計画教育のあり方に取り組んでおり、これらのテーマに関しても、いずれそれぞれ「混住地域整備論」、「環境管理学の構成と課題」とでも題してとりまとめたが、今回は、

総説執筆を依頼されたのを機に、“新しい日本型農村景観構造”を模索することとしたい。

親水性の向上を旨とする「水環境整備事業」や、快適な農村空間の創出を旨とする「農村広域生活環境整備事業」などが発足して、ルーツが農業土木だからといって“景観”に無関心では居られなくなったと思うからである。

以下、限りなく素人論ではあるが、素人なればこそそのフレッシュな問題提起をしてもいるか、との自負もある。ご一読願えれば幸いである。

II 日本の原農村風景と若者

日本の農村風景は、藁葺家屋とまではゆかずとも、緑に囲まれた黒瓦に白塀の農家屋敷が田んぼ越しに…といったイメージで語られ、描かれることが多い。農村型リゾートやナウい生き方としての田舎暮らしなども、白樺林にログハウスといったものへの志向も一部にはあるが、大方はその環境をそんなイメージで捉えている。“わが村は美しく”コンクールに代表されるドイツの農村整備・村落整備のコンセプトをもてはやす風潮なども、こうした、それぞれの風土での“あるべき農村イメージ”にこだわる風潮に寄与しているところであろう。しかし一方で、農村の若者は、緑に囲まれた黒瓦に白塀の生家に背を向けて、都会に憧れ都会に出てゆく。未来を担い、未来を築いてゆくべき若者からそっぽを向かれる、とまでは言わない

* 宇都宮大学農学部 Utsunomiya University, Faculty of Agriculture

までも、疎んじられている世界に未来実現のポテンシャルがあるといえるのだろうか。

若者は都会に何を見ているのか。ディスコや酒場の賑わい、あるいは出逢いへの憧れ、それらもあろう。が、だからといって現代の若者は出会いの期待に胸ふくらませて浅草寺の境内を歩いたりはしない。しかし江戸時代の若者はそうしたのである。当時の浅草は現代のディスコにも似たナウい繁華街だったはずだから。と考えると、若者を惹きつけているのは、昔も今も、一般的には都会の“ナウさ”、“モダンさ”だということになるのではなかろうか。

Ⅲ ウェイ・オブ・ライフのグローバル・スタンダード化

ところで、浅草寺は黒瓦に白塀の建物で、田舎を尊ぶ風潮の中でこのところもてはやされる伝統的農家建築と同類のものである。そして江戸時代の江戸の町並みもやはりその同類であった。江戸時代には、少なくとも空間構成要素の一つとしての建築物の性格の点で、都会と田舎に差はなかったのである。しかし明治の文明開化とともに都会の黒瓦に白塀の町並みは煉瓦建築にとって変えられて、赤レンガは“明治のモダン東京”のシンボルとなった。これを称して、鹿鳴館等とともに先進国西洋に伍してゆく方便と見、和魂洋才が日本人（人）の明治以降の方便的生き方だとする説が普通おこなわれている。明治120年にしてなお、家に帰っては和服にくつろぐさながら納得できるものがある。しかし見方を逆にすると、今や日常生活次元で和服で外出することはなくなっている。そしてその延長線上で現代の都会には鉄とコンクリートとガラスのモダン建築、ポストモダン建築がそびえ立ち、その間を背広姿の日本人が闊歩している。いわばウェイ・オブ・ライフが“西欧化”している。

しかし、こうしたウェイ・オブ・ライフの西欧化は、ひとり日本だけのものではなく、古代文明の一つの中心であった中国でさえ今や人々は背広を着ているように、あるいはインドの婦人でさえ今や日常生活では伝統衣装のサリーをスカートに

代えているように、非西欧社会の近代化に一般的などころでもある。算用数字の世界におけるアラビア数字ほどではないにせよ、“西欧的ウェイ・オブ・ライフ”はいまやグローバル・スタンダード化しつつある。

そして、こうした“西欧的ウェイ・オブ・ライフ”が本来の“西欧文明”と異なるのは、ルーツを西欧文明に置いてはいても、今やグローバルな交響関係のもとで進化する“人類共通文明”化している観がある、いわば“グローバル・ウェイ・オブ・ライフ”を形成していると見られる点である。新宿の副都心もバリの副都心も北京の副都心もマンハッタンもシンガポールも同じような高層建築にあふれ、その設計には各国の建築家が国籍を越え入り乱れて競いあっている。こうした大都会ではナショナルカラーはいまや影をひそめ、等しく“グローバル・ウェイ・オブ・ライフ”が“躍動”していることになろう。

ひるがえって田舎を眺めるとどうだろうか。よくドイツの田舎には短期、長期滞在をを問わず都会人が好んで入り込み、国土利用に新たな展開を切り開いている、それにひきかえわが国では…といわれる。しかし、見落としてはならないのは“グローバル・ウェイ・オブ・ライフ”が西欧文明をルーツとしている結果として、ドイツの都会人は今日でもドイツの田舎にあまりカルチャーギャップを感じずに済む点である。ドイツの田舎も結構保守的であり、建物の多くは何百年前のものであったり、酪農国のこととて食堂には蠅が飛び交っているなど、“遅れ”しているところも多い。しかし農家の建物は煉瓦造りであり、寝室はベッドで、朝飯に食べるのはソーセージとパンとミルクで……、と、民宿に訪れる都会人も格別の違和感を感じずに済む。けれども、わが国の田舎の場合はなかなかそうはゆかない。昭和30年代にスキーの民宿といえ、軒先につららの下がる藁屋根の中に囲炉裏のある大きな農家の座敷に雑魚寝と相場が決まっていた。おばさん手製の漬物を肴に囲炉裏端でおやじさんの田舎話に耳を傾けるのも民宿の楽しみの一つであった。そんな大きな農家は今でも多く残っているが、都会の若者はもう誰もそういう家に泊まりたがらない。個室にベッドの

あるペンションやホテルへ流れてゆく。

Ⅳ 農村の若者とスピリット・オブ・ウェイ・オブ・ライフ

いまや“グローバル・ウェイ・オブ・ライフ”の担い手と化したわが国の都会人にとって、田舎に残る黒瓦に白塀の景観や、伝統的な旅館での寢食などは、郷愁を誘うものではあっても、日常生活の一環に組込れるにはいささか違和感を伴うものになっているのではないだろうか。すくなくとも、そう考えると若者がペンションを好む理由を説明しやすい。ペンションは、いわば“グローバル・ウェイ・オブ・ライフ”のハードウェアの模倣のようなものだからである。

そして、ここが重要だと思うのは、現代の農村の若者が都会に憧れるのは、今や彼らも“スピリット・オブ・ウェイ・オブ・ライフ”において都会の若者と価値観を共有しており、都会人が感じると同様の違和感を自らの生活環境に感じ、違和感のない世界への同化を求めていることの現れなのではないか、と考えられる点である。

とはいえ、一方で、現在のわが国では様々な形で田舎への憧れも現われている。田舎暮らしの本が10万部の単位で売れたり、過疎地の藁屋根農家屋敷を都会の若者が買い取って住み着いたりしている。これらを兆候として、人間のまっとうな暮らしへの回帰の始まりとする見解がある。そうした運動を否定するわけではないが、筆者には、それらはしよせん都市住民による、現代の都市生活の有する諸矛盾に対する抵抗運動の一つにすぎず、これが農村部をあまねく覆ってあたらしい農村文明を切り開くものではないのでは必ずしもないとみている。

Ⅴ グローバル・ウェイ・オブ・ライフのハードウェアを具現してゆく責を負う農村計画

以上を一般化すると、ヒトの“スピリット・オブ・ウェイ・オブ・ライフ”はいまや“グローバル・ウェイ・オブ・ライフ”に統合されているの

に対して、ハードウェア次元でのウェイ・オブ・ライフの“スピリット”への整合は、世界的にもまだ都市部に留まっていて、田舎にまで及び切っていないことが、現代の田舎に“農村問題”を顕現させている、のだとも考えられる。

そのような見方によれば、“黒瓦に白塀”を尊守する形の農村整備を否定はしないまでも、やはりそれは一種袋小路に入り込む類のもので、メジャーな路線としてあるべき方向は、環境要素的メリットを生かしつつも“グローバル・ウェイ・オブ・ライフ”のハードウェアに改造してゆくことこそ現代農村整備だと言うことになるのではなかろうか。そうした田舎基盤の上でこそ、“躍動的”な現代農村と農村生活を再構築できるのだ、ということにならないか。(こういう言い方をすると多分、風土の違いとの関係での地域性、その一つとしての“日本の農村らしさ”の視点が欠落していると指摘されるであろう。そうした視点は、グローバル・ウェイ・オブ・ライフが豊かに展開するために当然重要であるが、論旨展開を明快にする見地から、今回はあえてこの点には深入りしないことにしたい)。

仮説を重ねた推論の結論ながら、仮にそうだとすると農村計画には都市計画がカバーする以外の部分に対する計画策定というに留まらない重要な役割が掛かっていることになる。都市が自律的に“グローバル・ウェイ・オブ・ライフ”のハードウェアに変貌してゆくのにに対して、田舎を他動的に、すなわち計画的に“グローバル・ウェイ・オブ・ライフ”のハードウェアに造り変えてゆく使命を負っていることになるからであり、自律的には現われないのかも知れないその“ハードウェア構造”を計画的に創出しなければならないことになるからである。

その場合、そうしたハードウェア構造はどのようなものか。現在の混住化の趨勢からすれば、全国の農村のほとんどが農家と非農家の共存するところとなって農業生産は宅地に取り囲まれたネコの額のようなところで飯米作のみが維持されるしかないのかも知れない。はたまた、地下にハイテク工場を蔵して就労先とし、地表の大半は高能率・環境適応型農業と生態系保全のための空間と

し、居住・文化施設はそれらを見渡す占有面積の小さい高層複合ビルに……などといった形もあるのかもしれないし、もっと突拍子もないものもありうるのかもしれない。

それらをゆたかにイメージし、それをハードウェア次元でデザインし、その実現のためのソフト・プロセスを構築してゆく、といった一連の仕事がすべて農村計画と農村計画家の肩にかかってくることになる。

Ⅵ む す び

本論執筆途上の平成4年6月8～10日に開かれた国際会議「景観計画と環境保全」で伊藤滋氏は日本型のアーバン・ランドスケープ・デザインを地方都市と巨大都市に分けて論じ、地方都市では、その風土性と歴史性を生かしながら、西欧先進国並の高い水準をもったランドスケープ・デザインが可能な時代が到来するだろう、とし、その際に大きな課題となるのが、瓦屋根や白塀に代表される伝統的な風土景観をいかに現代都市の景観に展開させるかである、と論じた³⁾。氏が言うところの“伝統的な風土景観”とは、本論で言う

“日本の原農村風景”とほぼ同じものと考えられる。氏は、続けて、それにはマクロな視点で都市景観の統一性とミクロな視点での町並みの秩序を同時に達成するような、高度なアーバン・ランドスケープ・デザインが求められよう、と論じている。すなわち、瓦屋根や白壁に代表される伝統的風土景観が町並みのレベルで今後も更新され続けられることが暗黙裏に想定されているものと思われるのであるが、筆者にはそれ自体が疑問なのである。

活発な反論をいただいて、日本の農村景観の行方についての論議を豊にする一助になれば幸いである。

参考文献

- 1) 富田正彦ほか：大区画水田の事例と考察，農業土木学会誌57(3)，pp 223－229，1989
- 2) 富田正彦，現代農村計画論，東京大学出版会，pp 226－227，1984
- 3) Shigeru Itoh : Toward the Establishment of Urban Landscape Design for Japanese Cities, Proc. of The University of Tokyo Symposium 1992 [International Conference on Landscape Planning and Environmental Conservation], pp 28－29，1992